九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宗祇の晩年

小島, 吉雄

https://doi.org/10.15017/2557123

出版情報：文學研究. 3, pp.33-68, 1933-02-25. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

宗祇の晩年

小島吉雄

一

數年前雜誌「國語國文の研究」に宗祇法師のことを書いた時、わたくしは引續いて宗祇法師の晩年生活について評傳すべきことを約束した。しかし、その後、他に緊要なる仕事を持ちはじめたがために、わたくしは宗祇を顧みるのいとまを持たなかつた。そのうちに、福井久藏氏をはじめ諸家の研究があらはれて、わが宗祇も漸く明るい脚光を浴びるやうになつた。それらの研究は、わたくしに色んな事を敎へて呉れた。わたくしは、最近まで再び宗祇を傳するの興味を有たなかつたのである。

然るに、此の頃わたくしは再び宗祇を顧みるの機會を與へられた。いろんな資料が集つて來た。先進諸家のすぐれた研究があるに拘らず、わたくしはわたくしの宗祇に關する資料を整理しておきたいと思つた。そして、同時に曾ての約束を果したいと思つた。乃ち、急に此の文章を書きはじめることになつたのである。

いつぞやわたくしは宗祇の筑紫旅行が彼の生涯に於ける劃期的役目をなしてゐることを物語つた。彼が輝かしい晩

年の生活は此の筑紫から歸つてのちに始まる。わたくしが此のたびの筆も、その前後からはじめようと思ふ。

宗祇は文明十二年の六月初旬周防の山口に下つた。門弟の宗長が同伴した。山口での宿所は本國寺であつた。筑紫旅行は九月から十月にかけて行はれた。九月六日に山口を出發して長門の船木に泊り、八日にそこを出發して長府の豐浦に宿り、豐浦宮宮司武内忠國の宅で連歌の一座があつた。寛政五年春蘆月園飯田範正が書留めておいた「苅藻の露」といふ古連歌集には、その時の百韻が收められてゐる。その表八句をあげると、

賦何人

月はみつ夕汐さむし秋の海　宗祇
かぜ見え初むる薄霧の松　忠國
山の端は時雨にちかく色付て　明猷
みやこ出ればしらぬ行末　宗賀
草枕夢にも遠き旅の道　良性
夜深き空に雁歸るこゑ　宗作
水つらき霞を波や越えぬらん　桂舞
雲閑かなる春の川上　宗歡

此の一座で宗祇は發句ともで十八句を吐いてゐる。第三句を出した明猷といふのは、龍泉院明猷律師、筑紫よりの歸途に再び豐浦にあがり此の律師の坊に訪ねて來て、

日頃の旅のさま又都の事などもろともに物語して、朝に會あり、

をくりきてこふ宿過るしぐれかな

と宗祇がその紀行にしるしてゐる。すなはち歸路にはこの人の坊で一宿したのである。

筑紫旅行のことは宗祇自身の筑紫道記にくはしく出てをり、わたくしも嘗て博多百韻の紹介と共にくはしく述べたから、今は言はぬ。此の時、宗祇は六十歳、老齢の彼としては、まことに感銘の深い大旅行であつた。

宗祇は、いつ頃歸洛したか、それについては今のところ明確な月日が分らない。筑紫から一旦山口へ歸り、そこでなほ暫く滯在して、文明十三年の夏頃には都に歸つて來てゐたやうである。大日本史料に引用する後法興院政家記では、その年の十二月廿九日宗祇は政家の邸を訪問してをる。

文明十四年は後の七月十四日に中院通秀を訪問してゐるが、彼が通秀に會ふのは、今度が初めてである。通秀の日記によると、面談如舊識、とある。十一月十六日には、東常縁から拾遺愚草の歌五十八首の口傳の切帋を受けてゐる。常縁は、人も知る古今傳授の創始者である。宗祇との交渉は文明三年にはじまつてゐる事は今更ら申すまでもなからう。拾遺愚草は藤原定家の家集である。常縁に拾遺愚草抄の著のあることは、これまた識者の知るところ、即ち此の抄註に外ならぬ。此の頃は常縁も寄る年波で、身の自由がきかなかつた。此の切帋も平臥のまゝ、附添ひのものに口授して書かせたものであつた。大日本史料にあげる常縁十二月十八日の消息によれば、わたくし達は色々と興味ある事實に逢着する。

兵家茶話に、

東下野守は和歌の道に達し古今傳授の人なりしが、宗祇法師はるばる東國に下りて野州に謁し古今傳授を得たり。しかるに下野守は小倉山の色紙百枚所持し給ひけるが、宗祇が心ざしを感じて五十枚あたへられける。宗祇京都へ歸りし時何方にてかありけむ水主にかの色紙を一枚くれて、これは天下の重寶にて汝水主をやめて世を安くおくるほどの料ともなるもの也といひふくめらる。水主にあたへらるゝ程のことなれば知たる者どもに一枚づゝ五十枚を皆與れたり。當時世に殘りしは宗祇の散らされし色紙也。野州のかたに在りし五十枚は野州沒落の時燒失して一字も殘らずと也

といふ話が出てゐる。ところが、此の常緣の消息では、

黃門色紙一枚御やくそくを不違、遙に被取寄候て給候芳惠難算候。是者先度申つる常緣以前久所持候を賊に被奪失却候餘念不止候事奇特に再領候。昔を存出候而一人感涙候此程當郡之山中庵室をかまへ候て乍憚小倉の山莊になそらへ、老のすさみ所とせはやの有增に候。返々過分に候。

といふ。黃門はいふまでもなく京極中納言藤原定家を指すのである。常緣は秘藏の小倉色紙を賊徒に奪はれた。そして宗祇から一枚貰つて感涙に咽んでゐるのである。兵家茶話の物語はこれを潤色して傳へたのであらう。また此の消息には、

一、綿子三把歲暮祝儀として饋給候。貴老も御旅所にて萬不如意たるへく候。かやうの御志不謂候

とあるので見ると、宗祇も此の歲の暮には、美濃の旅宿にあつたものゝやうである。常緣は、また此の時、自ら書寫し自ら校合して秘藏の證本としてゐた拾遺集と後拾遺集とを宗祇に與へ、それに添へて「古今集傳受の時に門弟隨一

と定め申し候上、其れ以來彌御執心比類無き事に候。當道世に殘さるべきは、貴老ならではと存じ候間、常緣が形見と御覽あるべく候」と言ひ送つた。そして、

かきすててはかなき跡のもしほ草たが袖にかはなみはかからん

といふ歌をしるし、「老後はなににつけ涙もろく候て每事たしかならず候」と述懷してゐる。常緣、此の年八十歳。その頃の彼の生活や心境を偲ぶべく、且は宗祇への情誼を推察すべきよすがの文字である。

此の歳三月二十日には長谷の前大僧正道興の坊に於て、何人連歌百韻が行はれて、宗祇も列席してゐる。有名な大原十如院の三吟も此の歳行はれたのであるが、月日は分らない。恐らく春のことでもあつたであらう。作者は宗祇、宗長、及び櫻井基佐であつた。

文明十五年には正月八日に三條西實隆を訪問してゐる。宗祇と實隆との交遊は、いつに初まつたものか、明確なことは言へないが、文獻にあらはれたところでは、文明九年七月十一日宗祇の草庵で源氏物語卷二の講釋があつたときき實隆の聽講したのが最初のやうである。しかし、これより先、仝じ年の二月に時の內大臣三條公敦から竹林抄の書寫を賴まれた記事が實隆公記にあるから、此の七月より以前に既に宗祇のことはよく知つてゐた筈である。また、牡丹花肖柏は實隆とは竹馬の友であり、此の兩三年は三日にあげず肖柏が實隆邸に出かけて行つて彼の風流の相手をしてゐるから、此の肖柏によつても彼は宗祇の事をよく知つてゐた筈である。肖柏は宗祇の高弟であり、源氏物語弄花抄奧書によれば、文明七、八年の頃宗祇より源氏の講釋を聽いてゐたのである。蓋し、宗祇の名は既に一部の人達の間では有名である。公敦や肖柏やが實隆と宗祇とを接近せしめる機緣となつたのであらう。此の二人の交際は、此の文

明九年頃から急激に進んだものの如く、翌十年の正月には、實隆自身宗祇庵に參賀に出かけてゐる。宗祇の庵室は種玉庵と呼ぶ。種玉庵は東山にあつたことだけで、場所は、はつきり分らない。

さて、文明十五年の七月、その頃は宗祇は自庵にゐて門人たちと歌や連歌を樂しんだり、古典の講釋をしたりして日を送つてゐたやうであるが、その月の十八日に、飛鳥井雅親が田舍の方から上洛して其の庵を訪ねて來た。雅親は新續古今集の撰者飛鳥井雅世の子で、當時にあつては二條派歌學の正統を傳へる宗匠家として、堂上歌學の重鎭であつた。すでに入道して榮雅といふ。宗祇は此の飛鳥井家に早く入門してゐたのである。その入門の年月は明かでない。雅親やその弟の雅康は宗祇とは非常に親しい交際をしてゐて、宗祇の家の歌會にも此れ等の人々が打揃つてやつてくるし、また宗祇が遠く旅にでも出るやうな場合には餞の一つもしてくれたといふことが宗祇家集に見える。實隆や肖柏も飛鳥井家に入門してゐた。實隆の入門は文明七年で、その雅親との關係は全く師弟の禮を執つてゐるが、雅康とは儕等親友の關係にあつた。實隆が雅親に送つた入門の誓紙といふのが、實隆公記文明七年二月十三日の條に出てゐる。宗祇なども恐らく此れと類似の入門誓紙を入れたことであつたらう。

業に心敬なく專順なく行助なきのちにあつては、その力量といひ、その學識といひ、宗祇は連歌壇の第一人者であつた。杉原伊賀入道宗伊は宗祇の先輩でありその力量經歷も宗祇に匹敵するものではあつたが、古典の造詣に於て宗祇に一籌を輸するものがあつた。のみならず、宗祇には地方の豪族の歸依者が多い。就中、その尤も有力なる庇護者として大内政弘を有してゐたのである。彼の聲名は日に增して高まつて來た。文明十六年十月廿五日には小川殿に召されて將軍義尙の連歌の相手をするの榮譽を荷ふことになつた。之れが彼の將軍家と交渉をもつた最初である。宗祇

は此の年の前半は旅行に暮してゐた。九月下旬に京都に歸つては來たけれども、廿六日に實隆がその草庵をたづねたときなど、彼はからだを損ねて散々の弱り方であつた。しかし、そのうちには健康も恢復したと見えて、元氣よく將軍の連歌會に出席したし、その十一月の中旬には、自讃歌の註をも作つてゐる。自讃歌は後鳥羽院の御時、時の歌人十六人に各自自讃の歌十首を奉らしめて、それに上皇の御製十首を添へさせ給うたものだと言はれるものであるが、彼はその注釋を行つたのである。その註には、「ゆくとしををしまのあまのぬれごろも重ねて袖に波やかくらん」の解釋の如く間々如何かと思はれるものもないではないが、大體に於て要領を得た書きぶりで當時としては宗祇の鑑賞眼を認めていい。宗祇の一生のうちで最も愉快な古典講釋專心時代がこれから始まるのである。

二

文明十七年三月二日に飛鳥井雅康が春日社法樂百首續歌を張行し、宗祇もこれに列席したが、その翌月の廿八日から實隆のために源氏の講讀をはじめることになつた。

實隆は、かねがね源氏物語五十四帖を書寫してゐた。それが丁度此の閏三月廿一日に全部出來上つた。そこで廿八日から宗祇と肖柏との二人に源氏物語を讀んで貰ふことにした。最初は蓬の卷からはじめて、宗祇が皮切りをやつた。講讀が終つて酒を出した。その次は四月三日であつた。この日は宗祇が蓬の卷を講じ終つた。更にその次回は四月八日であるが、この日から暫く宗祇が來ずに肖柏がそのあとを引受けて榊卷から讀みついだ。十三日に榊卷を終り十八日に花散里と須磨の初めの方、廿三日に須磨の卷半分許、廿八日に須磨の卷を終り、五月三日と八日とで明石の

卷、十三日と十八日とで澪標、廿八日蓬生、此の廿八日には宗祇も座に在つて肖柏の講讀を聽いてゐた。肖柏の此の源氏講讀はなほ六月に入つても續いた。三日には關屋、繪合、八日には松風、十三日は肖柏の故障でやめて十八日は薄雲卷半分、七月三日薄雲卷末及槿卷初、七日槿卷を終る。大體五日目毎に講筵の定日を定めてゐたやうである。槿卷を終るとお祝に酒饌が出た。そして十五首續歌が興行せられた。肖柏の講義はこゝで一段落を告げたのである。次いでその七月の十九日からは宗祇が講讀することになつた。乙女の卷を此の日と廿三日廿六日の三回で讀み終つてゐる。實隆は殊勝々々といつて此の講義に感心してゐる。廿八日には玉鬘卷、この時は肖柏が來り聽いた。八月は、七日、八日、十一日、十三日、十六日、十八日、廿一日、廿三日、廿六日と續け、九月一日で梅枝卷にまで進んだ。九月三日、六日、八日、十一日、十四日、十六日、十九日、廿四日、廿六日、此の日に若菜下卷を終つて饂飩で酒が出た。宗祇はこゝで一應その講義を終つたのである。宗祇は六日からはじめて若菜の卷上下に八回もかゝつてゐる。此の章は可成りくはしくやつたのであらう。そのあとは、再び肖柏が引受けて、柏木卷から讀みはじめ、十月十一日、十三日、十一月十三日、十九日、廿八日の五回で御法の卷まで讀んだ。

此の源氏の講筵は長期にわたる大講義であつて、翌文明十八年の夏まで續けられた。すなはち、十八年の正月十一日に宗祇が竹河の卷を講じはじめた。肖柏、宗作、元成等といふ宗祇門下が座に列つた。十四日にはその續きを講じた。が、その次の二月三日の宇治十帖からは肖柏が講釋してゐる。これは宗祇が旅行に出たからである。肖柏は五月廿六日までの間に、橋姫から東屋までを講じた。宗祇は既に上洛してゐたので、六月十日から、また源氏を講ずることになつた。浮舟卷からである。十日から連日十八日までの間に宇治十帖を講じ終へた。十六日の如きは二度もこれ

を行うてゐるほどの熱心さである。十八日に終功したので實隆はその夕方宗祇の許へ謝禮に出かけた。

源氏の講義は二人してだつたとは言へ、實に十五ヶ月の長月日にわたつて、これを講じ終へたのである。非常な努力といはなければならない。わたくしは未だ實物を見てゐないが、國學院大學にあるといふ文明十八年の源氏物語聞書は恐く此の時のものなのであらうと思ふ。

宗祇はまた、この源氏講義の間にあつて、文明十七年の六月一日から實隆邸で伊勢物語を講じてゐる。宗祇の伊勢物語は已に定評があつたと見えて、これは半公開なものであつた。聽衆には、中御門宣胤、滋野井敎國、姉小路基綱など公卿中の錚々たる人たちがあつた。一日、六日、十一日、十三日、十六日、十九日、廿一日の七回で功を終へた。そして、その翌々日六月廿三日には德大寺內相邸で、宗祇の源氏帚木卷の講釋が行はれた。一體、德大寺家では、此の頃東坡詩の定期講筵が行はれてゐて、實隆は、いつもそれを聽きに行つてゐた。それで此の日も宗祇を誘つて連れて行つたのである。かくして宗祇の帚木の講義となつたのである。聽衆は、右大臣信量、大納言入道榮雅、實隆、基綱、それに中原師富など六七人の人たちであつた。講席があつてのち一盞が勸められた。座頭二人をよんで平家を語らせた。

宗祇の帚木卷の講義はその伊勢物語にも增して得意とするところであつた。彼は、此の德大寺邸での講義があつてから二週間目七月の七日に新作の帚木卷抄出を携へて實隆を訪問した。德大寺邸での講義草稿をもとにしての述作であると思はれる。所謂帚木別註と稱するものが是れである。

源氏や伊勢に關する宗祇の知識は一條兼良から受けるものが最も多かつた。兼良は一代の碩學である。宗祇が此の

人の知遇を得てゐたことは尋常ではなかつた。兩者の關係は應仁亂以前よりのことと考へられる。宗祇は兼良の連歌會に列席した。兼良は宗祇のために竹林抄の序文を書いたり、代始和抄といふ書物を著述したりしてゐる。肖柏問答抄によれば、文明九年に宗祇が源氏物語不審の條々を兼良に尋ねて教へを乞うてゐる。宗祇の學問は河海抄、花鳥餘情に負うてゐる。しかし、それらの註釋だけでは、なほ分らぬことが多い、それを兼良に尋ねたのである。宗祇には既に文明七年に種玉編次鈔なる著述がある。深く源氏を讀んでゐるものにして初めてなし得る業績である。はるか後年のことではあるが、明應五年に彼は源氏物語不審抄出を持參して實隆邸に出かけてゐることがある。明應九年は越後滯在中であるが、源氏物語研究書目要覽によれば、此の歳宗祇は河海抄、花鳥餘情の抄出をやつてゐる。源氏は伊勢物語と共に宗祇が生涯の關心事であつた。

伊勢物語に就いては宗祇の說は主として藤原定家本の奧書に則り、兼良の說にきき古註を參考としたものの如くである。知顯抄、愚見抄は彼の重要な參考書であつたらう。然し、伊勢物語の解釋には彼は些か自任するところがあつた。從來の註釋の蒙を啓いて自家の新說を樹立したところも尠くなかつたやうだ。その註釋の今に殘つてゐるものは、伊勢物語山口抄である。山口抄は延德初年周防山口に於て講筵を布いたときの講義筆記である。此の抄に於ける彼の特色は、單に字句の解釋だけにとどまらず、その歌文の妙味を明かにしようと努めてゐることである。彼は單なる註釋家ではない。

宗祇が伊勢物語の講義で最も名譽を擔つたのは、長享元年十一月の伏見宮家での講義と、翌二年四月江州鈎の陣屋に參申して將軍義尙に之れを講じたことであつた。

長享元年十一月五日から六、八、十、十二、十三、十四、十六日の八回にわたつて伏見宮邦高親王御殿で、宗祇の伊勢物語講釋が開かれた。親王の御懇切な御所望によつて三條西實隆が色々と配慮した結果であつた。此の講義は大變宮樣の御意に召した。十二日の如きには、後の後柏原帝勝仁親王も御聽遊ばされるといふ御人氣であつた。十六日の結願日には講釋終了後、一獻あり、三十首當座續歌が行はれた。一獻には宗祇もまた座に列なるの榮譽をもつた。御皇室と宗祇が結緣は、これを嚆矢とする。

宗祇が將軍の連歌會に參入したことは既に述べた。此のたびは義尙に召されて江州鈎陣屋に伊勢物語を講ずることになつた。總じて、宗祇が皇室や公卿への接近は實隆の手引によつてゐる、けれども將軍家との關係には實隆は全く關係してゐない。長享二年四月中旬、彼は江州へ下向した。十六日から八回にわたつて伊勢を講じ了つた。盆や花瓶などの下され物があつた。そして、その講了ののち百韻連歌があつた。此のたびの講義には、特に念を入れて、右中辨良近が左中辨の事と年記の相違する子細を具に講談するところがあつたといふ。歸洛の後、そのことを實隆に物語り且つ之れを文筆にものして誇示する彼であつた。

却說、文明十八年源氏物語の講釋を終へて間もなくの七月一日、宗祇は實隆を訪問して、古今集について色々と雜談を交した。その語るところは、主として常緣の古今傳受の如何なるものであるかの說明である。實隆の記錄するところによると、第一、不立不斷事について東常緣の言を紹介し、更に東家の家柄を價値づけて東家は二條と冷泉と相別れざる以前に先祖素暹法師が爲家から受けた說を傳へてゐると云ふ。第二、貞應本の性質を說明し、冷泉家に爲氏爲家不和云々の說のあるのは間違つた傳へであつて、此の貞應本は貞應二年爲氏の誕生を賀して定家の染筆したもの

であるこ述べる。第三、爲家こ爲兼こ六問答して爲世が結句の問答に言葉が出でず負けこなつたが、後日に勅撰を奉じてゐるのから見るこ之れは負けたやうで結局は勝つたのだこいふ常緣の說を紹介する。第四、古今を習ふ心得を說いて、古今を習ふ時は先づ心を以て本こする。だから最初から邪心を去つてこれを學ばなければならぬ、こいふここや、所詮は一子に傳ふる秘事口傳の事なごこいふのも只修身の道に在るのだこいふここを語る。第五、古今五重相傳の事を實隆が質すこ、何さま三重、四重の儀があるこ答へた。第六、淸濁の聲等の事は尭孝法印相傳の儀は大略常緣こ同樣であるが、少々兩者に相違がある。東氏祖、素暹法師は每年兩度上洛して道を爲家に問ひ大抵その淵源を窮め、その素暹の子行氏がまた爲氏の弟子であり、その家が連綿こして絕えず常緣に至つてゐるのであるから、常緣の說の方を採るべきだこ宗祇はいふ。

以上の話をきいた實隆は、誠に殊勝な事だこいつて、古今傳受に大いに食指が動いた。文明十八年十一月廿一日に自家用こして古今集新寫の筆を立て、廿八日にその功を終へた。中一日をおいて前後六日で出來上つたのである。廿九日からはその校合にかゝつた。それも終つて十二月三日には懸表紙をした。宗祇は十月下旬から越後の方へ下向してゐて、十二月の十日過ぎに歸洛した。そののち、宗祇は屢々實隆邸を訪問してゐるが、翌年春三月三十日になつて、はじめて、古今傳受についての打合せがあつた。二月十一日から三月初旬まで攝津の方へ行つてゐたのが、歸つて來て、やつこ此の打合せこなつたのである。四月六日には古今集講義の日取りを十二日からこいふここに取極めた。越えて九日には宗祇は實隆を訪問して講義中精進すべきを命じた。精進は魚一味は差支へない、房事は二十四時間を隔てなければならぬ。なごこ可成り面倒なものだつたらしい。實隆が此の時宗祇に送つた誓紙には、

古今傳受之說々更以不可有聊爾之儀此旨私曲候者可背　兩神天神之冥助者也依誓紙如件

といふのである。講義は豫定ごほり十二日から極めて密々に行はれた。廿五日に戀一にまで至つたが、廿七日から宗祇が田舍の方へ出かけるので、一先づここで中止した。宗祇は來月中旬に歸洛することを約した。實隆公記はその後五六の兩月の記事を闕いてゐるので、くはしい事實は分らないが、多分此の間に殘りの部分の講義が行はれたものと推察せられる。その年の八月二日に宗祇から古今序時十代事の口決相傳があつた。越えて長享二年正月二十日に宗祇は實隆邸に赴いて古今集切帋と源氏三ヶ事等を面授した。續いて十月二日越後から歸つて來て、また古今集に就いて聊か口傳があつた。その後長享三年三月三日同じく實隆卿邸に、古今集序聞書、並に三ヶ事内切帋一短歌事切紙一を持參して、密々に口傳するところがあつた。古今傳受は、こゝにその大略を結了したのである。

古今傳受の此の實隆に傳つたものは二條派の正統として幽齋にまで及ぶのであるが、宗祇は此の外、牡丹花肖柏や東素純にも之れを傳へたと言はれる。肖柏には何時傳へたか今集つてゐる手許の資料だけでは明かでないが、これが所謂堺傳受と稱せられるものである。東素純は常縁の姪で諱は胤氏、明應八年末に「かりねのすさび」といふ歌書一卷をあらはしたり、百番自歌合の判を實隆に請うたりしてゐる風流人である。宗長日記によれば、享祿三年四月に逝去したのであるが、此の人に古今傳受のあつたことは、宗祇終焉の記の文句で明かである。

宗祇が古今集講義は門下生一同の等しく聽くところである。實隆公記延德二年十一月十九日の條にも、

行二來、古今聽聞宗祇讀之云々一兩日終功、自愛之由相語

とある。行二は二階堂政行の法名、宗祇の門下である。また紫屋軒宗長の手記に、

古今集聞書五冊口傳切紙八枚氏輝へまゐらせおき侍る（中略）宗祇古人この道執心淺からずして諸家の師範となり殊に近衛殿下逍遙院堯空唯受一人の御口傳とかや、長阿同宿して數年無執心一紙の物もきかず知らずかし、やうやく此の集結緣ばかり只一篇あらあらの事なるべし

といふ。長阿は宗長の自稱である。宗長は深く皆傳を受けなかつたけれども多年同宿の間におのづと此の方面の聞書口傳のことがあつたのである。宗祇は自庵でも人々に古今集を講じたこともあつたらうから、かういふ程度の聽聞者はその數尠くなかつたらうと思ふ。然し、奥儀傳受となると、輕々には許さなかつたのである。因に、右の手記にいふ近衛殿下といふのは、近衛政家である。後土御門院の御諚によつて文明十二年に東常緣が上洛して此の人に古今傳受を行つた。逍遙院堯空は三條西實隆の法名である。

宗祇はまた文明十七年十一月十六日實隆に萬葉集十四冊を送つたといふことが實隆公記に見える。南北朝時代のこと、二條良基の筑波問答に、

此の頃は萬葉はやり侍り。まことに歌の根源にてあれば、よくよく御覽ずべきにや

と語つてゐるが、實に鎌倉時代から萬葉集を尊び、これが訓詁の事も專門的に研究せられるやうになつた。更に、藤原定家が三代集を讀むと共に萬葉集をも一見するやうにと人に勸めてから、その流れを汲むを以て誇りとする歌人たちの間には相當に萬葉集が貴ばれたのである。宗祇もまた其の傾向を追うてゐる。宗祇が萬葉集を重んじることは、早くその著「吾妻問答」に述べてゐるところ。定家が萬葉集を讀んだのは、その語彙を豐かにせむがためであつた。今、宗祇が萬葉集を讀むのも亦そのために他ならない。宗祇時代には萬葉集の完本は既に珍しいものになつてゐた。

闕本とはいひながら其れを實隆に送つたのは宗祇の厚志である。實隆はこれを殊の外喜んでゐる。宗祇には、萬葉集の注があるといふ。世に宗祇抄と稱せられる即ちそれである。宗祇抄に就いては久松潜一氏が校本萬葉集首卷に解說してゐる如く其の奥書日附の異なるもの數種がある。普通これは宗祇の著述を他の人が筆寫したものであるとせられてゐるが、わたくしは、なほ其れについては考究せらるべき點があると思つてゐる。宗祇は源氏や伊勢や古今の講釋に力を灑いだ割りには萬葉集には力を致さなかつた。わたくしの考へではその方面には彼として充分の自信がなかつたのぢやないかと思ふ。嘗つてその古今傳受の師東常縁に書を送つて山上憶良のことや大伴旅人の歌に就いて不審を質したことがあつた。その時の常縁の答は甚だ覺束ないものであつた。宗祇の萬葉集に對する知識も他の場合に於けるほどに深くはなかつたのでないか。凡そ今日殘つてゐる宗祇の抄本は大抵一度は何處かで講義した聞書である。ところが、わたくしは宗祇が萬葉集の講義をしたといふ文獻の徵すべきものに未だ接してゐない。實隆公記には延德二年九月二日並に十月七日或は延德三年九月二十四日の條など、屢々禁裡御本の萬葉集註釋をもとにして新寫してゐる記事が出てゐる。宗祇抄一本の奥書に爲廣筆寫のものがあるが、此の冷泉爲廣筆寫と實隆筆寫とは、或はその筆寫の原本を一にするものなのではなからうか。これは猶ほ識者の敎示を得たいと思ふ。

長享二年三月二十八日宗祇が實隆との歌話に際して、萬葉集に關し次のやうなことを物語つてゐる。

萬葉詞、夏そひくうなかみかたは、古註之分不審

なつそひくうねつつきたる事なるべし、田舍に田のうねをつくる事を「うなう」と云ふ事あり、五音相通也。うねかみかたの心にて、うなかみとつけたるにや云々

雪もほとろと云ふ詞、古註雪も螢もこいへり、是又不審。

雪もはたれの心なるべし、如何云々

宗祇には、以上に擧げた外に、長享三年三月二十三日詠歌大概を講じ、明應元年十二月七日には定家卿未來記雨中吟を講じてゐる。前者は延德二年に書寫せられた詠歌大概註となり、後者は明應八年に書寫せられた未來記並雨中吟抄として後世に傳へられた。未來記雨中吟の抄は東常縁の說に從つたのである。

長享三年正月廿九日に實隆を訪ねての古今集論、並に延德三年十一月廿七日の新勅撰集論に、宗祇は、古今とは、常に今代を以て本とする意である、といふことを說き、定家も今をもつて古を仰ぐをその精神としてゐたと論じ

スベテ古ヲアフグモ今ノ世ナクテハ成ガタシ、今ヲタフトブ心又古ヲヒキテ云儀ナレバ、必古今トイフニハ今ヲ本ニスル心アルベキ也

と述べてゐる。これは古今集に關聯しての立論であるが、以て彼が古典考究にあたつての指導精神も此の今を本とするといふのにあつたと考へたいものである。

三

わたくしは註釋家としての宗祇を語るに餘りに際ぎり過ぎたやうだ。ふりかへつて彼の連歌師としての活動を見よう。

帝國圖書館本によれば文明十七年の八月晦日、何人百韻興行に一座してをるが、總じて此の頃の連歌で宗祇關係の

ものの現存するものが尠いので、彼のくはしい斯界での消息も語ることが出來ない。たとへば、文明十八年の實隆公記を見ると、六月末に佛陀寺の連歌に宗祇發句、日をさへて秋を吹きこせ松の風、九月末日庵室の會に仝じく、風にたちし秋は木の葉に暮れにけり、十月四日の會に、仝じく、秋そめぬ山もありきや初時雨、などあるが、いづれもその懐紙は傳はらぬ。

此の文明年中のことかと思はれるが、長尾孫六に送るの書が京大平松家舊藏本にあるが、これは吾妻問答と合冊になつてゐて、奥書によれば、天正十九年二月上旬矢田寺舜長の筆寫である。尤も於武州五十子陣所、宗祇在判とあるのみで、年月がないので、いつの作か、はつきり分らぬ。福井久藏氏は「連歌の史的研究」の中で、此の書を以て文明十八年中の作だとしてゐられるが何か他に確證があつてさう言はれるのであらうか。もし、文明十八年の作であるとすれば、その正月から二月にかけて彼が在國中に出來たものでなければならぬ。此の書物は、宗祇の連歌論書として、「吾妻問答」「老のすさび」に匹敵する貴重な著述である。

文明十七年七月廿三日の實隆公記を見ると、宗祇が自らの連歌集「老葉」の清書を實隆に依頼してゐる記事が見える。これによつて、老葉の出來上つた年代をわれわれは類推することが出來るのである。今日傳はつてゐる老葉は、十卷本であつて、宗祇の所謂編み直したものである。此の實隆書寫のものは、その編み直すまへのものであつたらうと思ふが、どういふものであつたかは今日知る由もないのである。宗祇の連歌を集めたものに、老葉の他、萱草、下草があるが、萱草は刊本老葉の跋文によつて此の實隆淨寫よりは後に出來たものであらうと思はれるし、下草は更にそれよりものちの編纂であらう。下草が宗祇の作であることは、梅庵古筆傳にも出てゐるし、宗長の壁草の奥書にも

あり、宗牧の東國紀行によつても證明出來る。

宗祇と實隆とは、此の文明十七、八年の講釋を機緣として、從來に增して特別に親しい中となつたやうである。元來、實隆は宗祇よりは三十五年の年少であるが、禁裡出仕の間に或は敕諚により或は將軍の依賴によつて廣く和漢の書を書寫してをり、また彼自身が天賦の學問好きから自ら進んで色んな書物を涉獵してをり、また宮中の和歌の會などにも缺かさず出席してゐたから、その方面の嗜みもおろかならぬものがあつたから、宗祇としてもよき知己を得た感じがしたであらうし、實隆としても宗祇の學殖には畏敬の念を懷いたことであらう。おのづから兩者胸襟を開いての接近となつたのである。文明の末頃から、宗祇は在京の節には每日のやうに實隆を訪問してゐるし、實隆も時折りは宗祇のところに出かけて淸談をかはしてをる。實隆が宗祇に連歌のことや古典の不審などを質すのは當然であるが、宗祇も亦實隆に、發句の上五文字をどうすればいゝだらうなどと相談したり、獨吟二十首の批點を求めたり、或は續古今集中の不審の點を尋ねたりしてゐる。宗祇が頓阿の抄で堯孝法印の自筆だといふ國名名所一卷を携へて實隆に見せると、實隆はまた貫之の自筆集や頓阿卅首和歌自筆やなどを宗祇に見せてやる。或は、宗祇は實隆に、兎の毛を送つたり唐墨を送つたり、錢一緡を送つたり、旅の土產だと言つては、色んな食物や器物をその時々に持つて行つたり、定家卿小倉色紙形を送つたりしてゐる。長享の末年頃は實隆は內障眼（ソコヒ）をわづらつて困つてゐたが、宗祇は、これに目藥を送り、更に山口で聞いて來たのだと言つて色々と養生法を敎へたりしてゐる。實隆は實隆で、珍藏の香五種を遣はしたり、宗祇が賴むまゝに源氏を書寫してやつたり、新古今集や源氏五十四帖の外題を書いてやつたりしてゐるが、殊に扇面に歌を實に驚くほど度々書かされてゐる。恐らく宗祇はこれを以て旅行先などの土產にするのであ

らうが、延德二年の大晦日の如き、暮の忙しい時に困るなどと、こぼし乍らも矢張りこれを書き與へてゐる。のちには、實隆の方から家事向のことまで宗祇に相談するやうな仲になつてしまつた。宗祇は、また自分の內弟子は勿論のこと、名もなき田舍武士をも實隆のところへ連れて行つて引見させることがあつた。實隆が後年かういふ地下連歌師仲間に隱然たる大勢力をもつたのは、かうした宗祇の手引きによるのである。

文明末年の實隆公記にあらはれた宗祇の連歌談のうちには注意すべきものが多い。殊に獨吟連歌の心得、源氏のとり樣など斯道研究家の參考となるべきものであるが、今は紙數の長からむをおそれて省略する。

四

文明十九年は七月二十日夜改元せられて長享となつた。長享元年の十二月二十六日には種玉庵で三十首續歌があつた。實隆や飛鳥井雅康や姉小路基綱等が參會した。披講があつて酒が出た。實隆は大變醉つてしまつた。

長享二年二月四日にも三十首續歌があつた。飛鳥井雅親も雅康も參會した。二十六日には飛鳥井雅親の邸で五首和歌の披講があつた。宗祇も酒肴を携へてこれに參會した。盃酌數巡、傾城などが現はれて美聲で歌をうたつたりして甚だ座が賑つた。夕暮に散會した。

此の年の三月の末になつて、將軍家から宗祇は連歌會所奉行を仰付けられた。古來の傳に、宗祇は後土御門天皇から花の本の號を賜はり連歌宗匠となつたといふは、誤りである。幕府の會所といふのは北野に作られてゐた。永享の頃は高山宗砌が奉行をつとめ、ついで能阿がこれをつとめた。宗砌の時から此の奉行を宗匠といふ。俗に此れをまた

花の下とも呼んだのである。由來、花の下の稱は古くから用ゐられ、心性院澄雅が由阿上人を讃へた言葉に、上人者西都花下槐備門師範、東關月前爲藤澤客衆、といひ、無住の沙石集にも花下の十念坊といふ名が出てくる。普通、花下の起りは、筑波問答に、

地下にも花の本の好士おほかりしかども、うへさま道の人々の上手にて有しかば、取分けてぬけ出たるも侍らず道生、寂忍、無生などといひしもの等毘沙門堂、法勝寺の花のもとにてよろづのものおほくあつめて春ごとに連歌し侍りし、それよりぞいろいろに名を得たる地下の好士も多くなり侍し

とあるのに從ふのであるが、藤井乙男先生は、「菟玖波集序文に久しく雲の上のもてあそび花のもとのたはむれとなれりとあるより出づ」と言はれてゐる。蓋し、それが後に將軍家の北野會所の宗匠を花のもとの宗匠と呼びならはすやうになつたのである。元來、地下にして僧體の連歌師をいふのである。

さて、此の會所奉行となることは、連歌師として極めて名譽なことでなければならなかつた。然し、宗祇は自らその任でないと考へて、江州の陣中に將軍を訪ねて仔細を言つて斷つたのだけれども、聽されなかつたので、止むを得ずこれをお受けした、と實隆に語つてゐる。その年の四月五日、宗祇は奉行職としての會所開きの會を興行した。その時の宗祇發句が、有名な

あらぬ名をかるや山彦ほとゝぎす

の句であつた。史籍集覽所收、湯川彦右衞門覺書には宗祇が此の時、湯川政春の姓をかりて湯川姓を名乘つたのだといふことが出てゐることは衆知のことだが、事の眞疑は保證出來ぬ。宗祇茲歳六十八であつた。

越後の守護上杉房定は宗祇の最も親しき門弟であり、且つ有力な保護者であつた。房定の子民部大輔定昌は三月二十四日關東に於て頓死した。切腹らしいなどいふ風評が半月おくれて四月九日頃都の方へも聞えて來た。生年二十六といふ。宗祇はそのために一品經を勸進した。彼には重恩の武士だつた上に、彼は此の青年を深く愛してゐたからである。念珠をつまぐる手も哀しみのために兎角亂れ勝ちであつた。彼は更に越後のはてに、その墓を訪らはうと思つた。だが、彼も寄る年波である。長途の旅まことに心細く思はれた。實隆を訪れて、「遠國下向の間再會を期し難い、自分に若しもの事があつたら、聞書など必ずあなたに差しあげませう」などと約束するのであつた。然し、その後、將軍から伊勢物語の講釋に召されたために江州に行つてゐたりして、出發は五月の九日になつた。實隆から越後への土產に扇歌三本を書いて貰つて携へて行つた。彼の歌集には、六月十七日に定昌の墓所に詣でたと出てゐる。滯在は一月足らずであつた。七月の十日頃に歸路についたが、途中道草を食つてゐたのであらう、九月の末に京に歸つた。

歸庵後の宗祇はまた繁々と實隆を訪問して歌談を交した。また、自庵に月並の會を設けては人々を招請した。宗祇の月並歌會に出席する定連は、冷泉爲廣、滋野井敎國、姉小路基綱、飛鳥井雅俊、飛鳥井雅親、仝じく雅康、中御門宗綱、三條西實隆、等の公家連をはじめ、武家では、遊佐九郎左衞門尉長孝、上原豐前守賢家などいふ人々、それに肖柏、玄清、宗作などいふ門下の僧達であつた。十一月十九日の月並歌會には雪が降つた。宗祇は庵の庭に雪で富士山を作り、それに薫物の煙をかほらせて興を添へた。此れに雅懷をそそられて飛鳥井雅康入道が發句を口吟んだ。庵主宗祇が直に之れに應じた。即ち

雪積るここまでふじをしらね哉
都路さむし北の山風

第三を雅親が、

さゆる夜の月の南に雲去て

第四句を實隆が

江の水遠く雁のくる空

と續けた。此の時の雅親の歌に

いづくより空にたくぞと思ひしはけふふる雪にたつ煙哉

とある。

宗祇が分葉を書き著したのも此の年の冬であつた。福井氏もいふ如く、京大平松本によつて、これは此の長享二年冬宗祇が相良氏のために書き送つたものと斷ずべきである。同じ言葉で意義用法の異なれる詞を集めて解說したものであるが、宗祇はかういふことを初心者のために非常に重んじたのである。長尾孫六に與へた手紙の中にも、その終りの方に、「歌の詞に、聞きはひとつにて心のかはる事あるを」こまごまと說明してをる。

宗祇はかく風流雅筵に平穩なる日を送る間にも、十一月上旬江州鈎の陣屋へ出かけて飛鳥井雅親の古今集講義を聽聞したりしてゐる。

長享二年はかくして暮れた。翌三年は春三月二十六日に將軍義尙が江州の陣中で薨じた。その日は宗祇は草庵で人

人をあつめて歌の會をしてゐたが、此の計を得て、早速、花といふ題で、

　　するの世のあらき風をも治むべき人なぞ春の花に散るらん

と詠んだ。

宗祇は、丁度その頃、筑紫旅行以後はじめての山口下りを計畫してゐた。彼は三月二十九日晩春の空おぼほしき日に都を立つて西に向つた。その數日前、實隆は餞別として伏見宮邦高親王御染筆の扇を宗祇に饋つた。宗祇は下向の途すがら、明石の月の曇れるを見て、義尙のことを偲ぶのであつた。

　　この君の御歌にかがみ山とおもひしこともなごあそはされけることをおもひいでまゐらせて

　　鏡山光かくれしおもひにやあかしの月も猶くもるらん

彼が如何に常德院殿義尙を德としてゐたかが察せられる。

五月の初旬に山口に着いた。七日からあちこちの連歌會や歌會に出席した。物語類の講釋を行つたりもした。曩に述べた伊勢物語山口抄の出來上つたのは、此の滯在中の事であつた。恐らく、七月の末か八月上旬まで滯在してゐたのであらう。九月中旬には京都に歸つてゐる。

福井久藏氏の連歌の史的研究には、宗祇は此の八月に會席二十五禁を定めたとある。わたくしは、まだそれを見てゐない。

此のたびの山口下りには、宗祇は宗長を伴つてゐない。宗長は宗祇の留守中再三實隆を訪問してゐる。これは、宗祇の旨をうけて、實隆の所領知行の事に關して盡力するためであつた。七月廿日には波伯部兵庫助盛卿を伴つて實隆

を訪問してをり、その廿九日には丹波の知行分の事に就いて波伯部の書狀を齎してゐる。波伯部は、細川の身內、新蒐玖波に五句收められてゐる人である。此の人を通じて細川家の盡力を求めたのである。

歸洛後の宗祇は、實隆を訪ね、雅親を訪問して、しきりに打聞の事について計畫をたてゝゐる。どういふ計畫だつたかは、はつきり分らないが、これは、實現せずにお流れになつてしまつたらしく、十月十五日から攝津の有馬に湯治に出かけてゐる。その頃、攝津には牡丹花肖柏が在住してゐた。また、伊丹、池田地方には連歌の門弟も居つた。宗祇は此ののちも、屢湯山へ出かけてゐるが、一つは湯治が目的ではあつたが、旁々肖柏に會つたり、これらの門弟たちと語らはんがためでもあつた。此のたびは二週間で歸洛した。そして、その十一月十六日に、連歌十問最秘抄といふ書物を實隆のところへ持參してゐる。これは後普光園攝政二條良基が大內左京大夫義弘に書き與へた連歌の抄であるが、これを龍翔院三條公敦が新寫したのを大內政弘が宗祇に奧書を書くやうにと依囑したのだ。此の書物はまだ世に知られてゐない書物だからといふので實隆はこれを禁裡へ進上叡覽に供へ奉つた。實隆のいふところでは、連歌の至要書であり、秘藏すべき大切なものである。此の書物はどういふ內容だつたものか分らない、今日、どこからか其れが發見せらるれば甚だ愉快であらう。

長享三年は八月廿一日に改元、延德と號した。實隆公記では、此の延德元年の十二月十八日の條に、兼載法師が會所奉行を仰せつけられたといふ事が見えてゐる。宗祇はこれより前に既に會所奉行のことを免ぜられてゐた筈でなければならぬ。

明れば延德二年、正月十一日に宗祇庵で何人百韻が行はれてゐる。二月二十五日にも同じく何人百韻が行はれてゐ

る。これは今度わたくしが發見したものだが、作者は、宗祇、行二、兼載、忠胤、肖柏、宗長、玄清等十二人宗祇は發句以外に十二句を吐いてゐる。宗祇發句

花やあらぬきのふは雪の山さくら

冴つる春も長閑なるころ　　行二

鳥の音も霞の朝日ほのめきて　　兼載

相當にすぐれた一卷である。總體に、此の延德年間の宗祇連歌は比較的多く傳はつてゐる。

延德二年では、三月五日の何人百韻及何舟百韻、四月九日の夢想百韻（福井氏の連歌の史的研究による）

延德三年では、二月の何船百韻、十月二十日の湯山三吟何人百韻・延德四年では、正月二十二日の路何百韻、二月八日の何人百韻、三月十九日の於七條道場山何百韻、六月朔の何路百韻（此の百韻、六月廿七日となつてゐる寫本がある）

これらが今日知られてゐるものである。

さて、延德二年三月廿六日は故常德院殿義尙の一周忌である。宗祇は故人追慕の志の止み難きものがあつて、四要品を書寫して和歌を勸進した。經文の裏にそれぞれの和歌を書くのである。方便品は大納言入道雅親、中御門新大納言宗綱、三條西實隆、安樂行品は、滋野井敎國、飛鳥井二樂軒雅康、冷泉新中納言爲廣、壽量品は、姉小路宰相基綱、飛鳥井雅俊朝臣、觀音品は、行二法師、宗祇、以上十人である。そして、三月廿六日自庵で、その四要品和歌を披講した。讀師は實隆、講師は行二、發聲は雅康、雅康の歌は爲廣がこれを講じた。義尙は在世中數奇だつたからこ

いふので、披講ののち飲酒、大いにメートルをあげた。その時の宗祇の歌に、

けふにやはあらぬこめぐる月も日もそのよそゆめの春ぞかなしき

宗祇は茲歳已に七十歳になつたのであつた。

彼は前栽の松を見ては、

住馴れし宿をは松に讓置きて苔の下にや千世の蔭みむ

と詠じた。實隆の臺所向のために色々と盡力して、錢三緡金子二千疋を調達してやつたのも此の春のことであつた。

此の年の八月十七日及び十八日條並に九月八、九兩日の實隆公記には、禁裡から敕諚を以て宗祇に御連歌を合點せしめられたことが見える。勿論、實隆がその御取次をしたのである。同樣の記事が延德三年四月八日の條にも見える。これは特筆すべきことである。所傳の如く、宗祇が天顏に咫尺し奉つたことは文獻の方にはあらはれて來ないが、かやうにその名が天聽に達して、而もその合點が頗る叡慮に叶はせられたといふのである。宜竹和尙のいはゆる「名喧天子寰」と言つたのは、此の事實を指したものであらう。

實隆はまた延德二年九月廿四日に御學問所に於て、宗祇作の連歌抄を勅命によつて御讀み申しあげてをる、また、その禁裡御本の連歌抄を借りて十二月十八日に筆寫校合の功を了してゐる。それはどういふ內容の本であつたかわたくしは知らないが、かういふ事實は、彼が後年新菟玖波撰進の事業の上に大變便宜があつたことと考へる。

延德二年から三年春にかけて宗祇は自庵にあつて悠々自適してゐた。或る時は伊勢源氏古今を講じ、ある時は、歌を作り、連歌をつくり、また或る時は實隆などの風雅の人を訪れては閑語に興を遣つてゐた。

三年二月十一日に實隆邸で十炷薫を興行した。宗祇も出席した。彼にとつては大變愉快な忘れがたい日であつた。これより先に彼は實隆に沈一裏を送り、また黒方の薫物を一貝送つてゐる。彼は其の方面にも造詣があつたのである。彼の鬚髯の立派であつたことは後世の語り種になつてゐて、山口素堂の如き「髭宗祇池に蓮ある心哉」の句を吟じ、彼の此のひげを蓄へたのは聞香の際の便宜のためであつたといふ説まで出來てゐるが、その事實は兎も角としても、彼が香道に長けてゐたことは、上述の記事によつても察せられると思ふ。

仝じく延德三年三月廿四日は、宗祇庵、人丸像新圖の供養廿首歌の興行である。此の人丸像は、宗祇晩年殊の外大切にしたもので、土佐光信が藤原信實の眞跡を模して描いたものである。

五

わたくしに與へられた紙數も業に盡きようとしてゐる。先を急がなければならない。筆削おのづから改まるを容されたい。

延德三年四月から明應にかけて宗祇はまた旅から旅へと日を送るの人であつた。

宗祇の旅行は生活の糧を得る便であつたのは事實である。さればと言つて、彼の旅行癖も手傳つてゐないとは言へない。彼は前にも言つたやうに屢攝津の有馬に出かける。湯治のためだから、大抵寒い時季を選んでゆく。彼の歌集や句集類で見ると、播磨、備前から美濃の方へも出かけてゐる。播陽の方は浦上氏を手賴るのであり、美濃は土岐氏を訪ねるのである。近くは攝津の堺に遊ぶこともある。晩年最も遠路だつたのは北國通ひである。越前に朝倉孝景を

訪ふのである。越後に上杉房定を訪ふのである。

宗祇は旅枕草を茵に死すべきことをかねゝ覺悟してゐた。延德三年五月の越後ゆきにも再歸を危んで、實隆に人丸の像と抄物類を入れた一合の荷に封印したのを預けた。だが、此の時は無事十月初旬に歸京することが出來た。實隆は抄物を返してやつた。實隆が、越前田野村の莊の年具未進米の事について朝倉家への交渉を宗祇に賴んだのは此の時のことであつた。同樣のことを明應の末にも宗祇の攝州行のついでに賴んでゐる。實隆公記を見ると、玄清や宗長や宗碩などにもかういふ金子調達とか年具取立てとかいふことを依賴してゐるが、もとはと言へば、皆宗祇の緣故からである。

延德明應の頃は、京都には饑饉疫病が流行し、一揆や盜賊が橫行した。一の人の姫君で泥棒に攫はれたなどといふ物騷な事もあつたりする世の中であつた。宗祇は一面さういふ世の中を避ける心もあつたであらうし、一つはまたからだの保養のためもあつたであらう、越後から歸ると直ぐ有馬に出かけた。有馬では十月廿日宗長、肖柏との所謂湯山三吟といふのを興行してゐる。水無瀨三吟と共に模範的百韻連歌とせられるものである。十一月の末には京に歸つた。

明應元年十一月十五日のことであつた。宗祇法師の提唱で源氏物語論議が實隆邸に開かれた。元來、源氏論議は古くからあつたらしいが、その記錄に明かなのは弘安論議である。弘安論議は弘安四年十月六日主上東宮御出座の上で行はれ參會者は夫々三條の不審を提出し、それそれに就いて議論を戰はしたのである。實隆邸今回の催しには、參會者各四ケ條の問題を提出することにした。午後から始めて宇治十帖の分五ケ條を殘して夕景に切りあげた。參會者

は、按察卿、實隆、宗祇、肖柏、兼載、玄清、宗長の七人である。肖柏が人々の問題を讀みあげると、實隆が難陳の要點を筆記した。會後、宗祇が持參の酒肴で一盞を傾け、粥の御馳走になつて散會した。此の日、姉小路基綱、宗高等案内を受けながら用事にかこつけて來ない人が數人あつた。此の頃には一般に源氏熱が冷めて來たので、かやうな集りを馬鹿にしてゐるのだと實隆は憤慨してゐる。

宗祇が晩年、生を賭しての大事業は新撰菟玖波集の撰進である。この集については已に先進のくはしい論述があるから、詳細は述べない。ただ、わたくしは、明應三年正月三日に新撰菟玖波祈念百韻連歌の行はれたといふことには疑ひを有してゐることを述べておかう。この百韻には實隆も一座してゐるのであるが、正月のころでは一言もこの事にふれてゐないからである。なほ、その興行年月については明應四年となつてゐるのがあり、或は三月となつてゐるのがある、なほ、よく考へてみたいと思ふ。但し、此の祈年百韻の行はれたことは疑ひを入れない。

明應三年は實隆公記にも闕くるところがあるので、くはしいことは分らないが、宗祇は此の年の春二月頃には在國してゐた筈だから、その頃には未だ撰集のことに掛つてはゐないと見るのが至當である。恐らく此の新菟玖波集は、長く見積つて一年そこそこの間に出來あがつたものであらう。

兼載法師の所說では、此の集のことは大内政弘の勸めによつたのであるといふ。而して、その序文によれば、一條冬良が父の遺志を繼いで宗祇をしてゐらばしめたのだといふ。蓋し、どちらもその一面の眞を傳ふるものであらう。勅撰に準ぜられるについては、冬良の進言もさることながら、實隆の斡旋も大いに力があつたらう。はじめ、此の撰集に關しては宗祇は猪苗代兼載と共撰することになつてゐた。ところが其の後兼載と宗祇との間に意見の不一致が生

じた。無論、わたくしには其の理由の何だつたかは分らない、が、兼載維談中に

新つくば集の時句數多少量負あるこて相論のさたしげかりし時兼載云わが句を一句も此の集に不入して集のいろいをやむべし、こありしに、宗祇云兼載こ我等が句不入ば此の集おもしろくあるべからずこ有しこなり

此樣な事も兩者を阻害する一障壁こなつたに違ひない。宗祇のこの撰集に對する自信のほごの甚しかつたに基づく。また、

同集に道眞法師こいふ作者入たり、口惜しき事なり、關東太田の御名乘なり、惣而此集不足の事おほしこ申せり

道眞法師は道灌の父太田備中守持清のここである。道眞は心敬、宗祇にこつては恩顧の士である。宗祇がこれを入撰せしめようこするのは人情である。兼載はそれを不服に思つたのである。

此の集編纂については、いろいろ自薦運動をする輩も多くて相當厄介だつたらしく、櫻井基佐が、

はるかにつくばを見れば錢あればすなはち入る、上手こ下手こを論ぜず

こ言つたのなごも其の弊害を述べたものであらう。基佐の句が入撰してゐないのなごも不思議こいへば不思議の一つである。宗祇はかういふ情實的紛糾のために、止むを得ず、自分獨力で此の集を編纂するここにした。そこで、實隆を通じて、親王家の御内意を伺つて貰つて、宗祇獨力でやつても准勅撰にせらるべきの豫想をつけて、愈本氣に着手したらしい。

新撰菟玖波集はかくして明應四年六月廿日に出來上つた。高臺寺日記明應四年七月のこころに去月廿日新菟玖波集を撰するこあるのがその證である。冬良のその序文にも「明應四年六月廿日にしるし をはりぬる」こあるが、これ

は、撰集後彌々禁裡に捧呈するに定つてから書いたもので、兼良が竹林抄の序文を書いたのと同じ譯合のものである。

撰集が終ると宗祇は門弟肖柏玄清宗仲等を率ゐて、悉く之れが校訂のことにあたり其の年九月十三日を以て恭しく禁裏に奉獻した。禁裏からは御感の趣の女房奉書を賜り、實隆これを宗祇の草庵に持參した。これで見ると、冬良の序文は大分割引きして考へなければならぬのである。菟玖波集の撰進に救濟が全く蔭の人となつてゐるのとは趣がすつかり違ふのである。しかし、其の翌々日、又實隆を通じて再校合のことを敕命あらせられた。宗祇は更に門弟宗坡に助けしめて再校訂を終へ、これを奉獻したのである。即ち明應七年十一月禁裏から三荷二合の酒肴を下さるることになつたのである。かくて新撰菟玖波集の功成るや、此の年の十二月に長州一宮住吉神社に法樂和歌を奉納した。此の時の作者は實隆、宗祇、肖柏、宗長、宋世等である。その時の宗祇が歳暮と題する歌に、

ゆきかへりかぎりはなきを暮れはつと思へば年も老ぞかなしき

宗祇は明應五年頃から耳が少々遠くなり出して來た。しかし、からだは達者であつた。旅に出る元氣もあつた。

連歌の方は、さすがに明應四年のものは今のところ見つからない。明應五年正月九日清水寺で行つた賦何人の本式連歌百韻、明應八年三月賦山何百韻、此の二つとも獨吟である。あとの方は宗祇の獨吟の最後のものである。宗祇自ら語るところによれば、宗祇ほど獨吟を數多くしたものはあるまいといふ。記念のためにその表八句をあげてみる。

限さへ似たる花なきさくらかな
しづかにくるる春風の庭

ほの霞む軒端の嶺に月出て
　おもひもわかぬかり臥しのそら
來し方を何國と夢の歸るらん
　行人見へぬ野邊の杏けさ
霜迷ふ道は幽に顯れて
　かるるもしけき草むらのかけ

宗祇の句は初期は翔りすぎて浮華に流れ、中頃はいはゆる長高き體を得て圓熟の域を示したが、晩年に至ると枯蒼にして幾分拮屈の趣すら加つて來た。一面から見ると平板にすぎ、他面からみると難解に過ぎる。兼載雜談に、

一、宗祇老後にきこえぬ連歌をわざとせらるると人皆心得たり、それにてはなし、色々の句を盡して、あらぬ方を案ぜられしゆへなり、それをかの門弟ごも年わかくして老後の作を學びし程に連歌にくていにてあしかりしとなり、祇公のとしざかりの句を學ばば、よかるべきなり

わたくしをして臆斷をゆるさしめるならば、宗祇は專ら連句附合のにほひに心をおき深くこまかい幽韻に心をとめた結果、句立ての方では却つて平板なものとなり、一方では前句との連絡が非常にかすかになつて一見その間に意味のさとりがたいものも出來て來たのであつた。

明應七年新撰菟玖波校訂のことも終り、一身の安らかさを得た宗祇は、翌八年の晩秋

　身や今年都のよそのはるがすみ

の句を殘して越後の方へ國守上杉氏を賴つて京都を出た。

文龜元年は越後で暮した。彼は、越後では靜かに老を養つてゐたやうである。門人紫屋軒宗長はその居所駿河を發つて越後に師の老いを見舞つた。それから後のことは彼の宗祇終焉記に審かである。

宗長は文龜元年六月宿を出て九月初め頃越後國府に着いた。宗祇はその頃すでにおのれの命終の近からむことをさとつたのであらう、例の古今集聞書以下相傳秘藏の抄物を函に納めて京都なる實隆のもとに送つた。九月のことであつた。これは、かねがねおのれの死後は實隆に與へようと言つた約束を果すためであつた。翌年二月、宗祇は

我も此の國にしてかぎりを待侍れど命だにあやにくにつれなければここらの人々のあはれびもさのみはいとはづかしく又都にかへらむも物うし。美濃國にしるべありてのこるよはひのかげかくし所にもとたびたびふりはへたる文あり。哀れともなひ侍れかし、富士をも今ひとたび見侍らむ

と言つて、宗長等と共々越後を立出でたのであつた。宗祇は此の頃已に中風の症として歩行も思つた程自由でなかつたらしい。伊香保の湯は中風に效驗があるときいて其の方へ廻つた。そこで賦何衣の伊香保三吟を作つた。四月二十五日のことである。しかし、そこで病ひそめて湯におりることも出きぬといふ有樣であつたが、病をいだけるまま旅をつづけ、箱根の麓湯本に到つて遂に白玉樓中の人となつた。時は文龜二年七月二十九日夜半。死因は老病である。享年八十歳。

宗長は師匠の一生に感慨を洩して、

かく草のまくらの露のなごりもただ旅をこのめる故ならし、もろこしの遊子とやらんも旅にして一生をくらしは

てつとかや

旅の世にまた旅ねして草枕夢のうちにぞ夢をみる哉

と慈鎭和尙の御詠心あらば今宵ぞ思ひえつべかりける

と述べてゐる。

まことや、宗祇の生涯の大部分は旅の生活であつた。關東を遍歷するだけでも七ケ年十一ケ國、あらゆる富士の眺めを見盡して猶ほ今一度と望む宗祇であつた。當時の連歌師は皆旅をすみかとしてゐるとは言へ、それにしても宗祇は格別である。

彼はかくの如く都鄙の間を往來して席のあたたまることなく、常に現世無常を觀念し、一入物のあはれを體驗した。彼の連歌は旅の作に於て最もすぐれてをり、彼の感懷は老の述志に於て最も惻隱の力がある、亦宜なりと思ふ。

遺骸はそのまま輿に乘せて足柄山を越え駿河國境桃園の定輪寺に葬る。埋葬は八月三日まだ明ぼのに、寺の門前少し引き込んだところ、きよらかに水の流れてゐるそばに松があり梅櫻がある、そこの土に埋めて、松一もとをしるしに植ゑ塔婆をたてて荒垣をして、一七日の間同伴の門弟一同ここに參籠したと宗長は重ねて書きとどめた。

八月晦日は宗祇月忌のはじめである。素純らも來り會して宗長庵室に於て連歌を興行した。宗長發句、

虫の音に夕露落る草葉かな

其の後、毎年年回のたびに宗長法師は缺かさず師の追善連歌を興行してゐる。

宗長が宗祇の葬ひも終へて一段落をつけた時に兼載が奥州から宗祇の死をきいて相州湯本を訪ねて來た。文にそへ

て宗長に長歌を送つたその反歌

おくれぬと歎くもはかないく世しも嵐のあとの露の憂身を

宗祇の訃の京都へ傳はつたのは大分遲れてゐた。實隆公記に記すところでは彼は宗祇の死におくるること一ケ月ののち玄清法師からその事をきいた。

宗長法師は宗祇門下中の高足であるが、彼は宇津山記によれば駿河國島田の宿の鍛冶屋の三男である。十八で法師になり、受戒加行灌頂をも受けたが、應仁の亂後遠江の亂（今川義忠戰死し北條早雲の蹶起を見たる亂なり）に彼もまた在陣し、その後、京、奈良を漫遊し高野の奥を知らうと思つて國を出た。彼が宗祇に會つたのは京都に於てであつたが、いつ頃かはつきりしない。文明十二年より以前であり、すでに中年に入つてからのことであつた。宗祇と宗長は二十七歳の相違である。文安四年の生れ、享祿五年三月六日歿。黑川道祐の宗長居士傳には誤りがある。實隆の雪玉集にも享祿五年卯月六日宗長追善の歌があるからその歿年は坂昌成の說の方が正しい。宗長には男女二人の子供のあつたことも其の宇津山記によつて明かである。

宗祇門下には上にあげた肖柏、宗長、玄清、素純等の外に、月村齋宗碩、宗梅、宗閑等その名の相當に聞えたるものが多い。宗祇庵同宿の門弟は、新撰菟玖波に見えてゐるだけでも宗益、宗仲、等兩三人ある。武家には小笠原美濃守以下宗祇に道を問うたものは隨分多い。もつとも、其の人達は悉く宗祇の門下生とは言ひ切れない關係にあつた。

俳家奇人談には、宗祇の辭世なるものを載せてゐるが、宗祇には辭世らしい辭世のなかつたことは、その終焉記によつて明白である。宗長の壁草の「宗祇禪師或山寺にして、うの葉さへ花橘の色香かなとつかまつりて身まかりぬる

……」こある詞書から察すれば、此の「うの葉さへ」の句こそ辭世こ言はば言ふべきものだつたかも知れぬ。

肖柏法師の家集春夢草によれば、宗祇は、あの晩春の薄暮籬の隅に見る人なくて黄花ほのかなる山吹の深きあはれを愛したのである。あの晩春初夏の山吹の哀愁こそは、念々離俗の志ありながら、なほ名利をすつる能はず、深く造化の樞機に參ぜむこして未だ二條派末流歌學に妨げられ、終始迷妄抖擻のうちに生を滅盡したわが宗祇の生涯を彩るに如何にもふさはしいではないか。

宗祇歿後、京都でも地方でも、年々その追善供養が行はれ有緣の士をして追慕の涙をいついつまでも新たならしめてゐる。わたくしは宗祇が有德の士だつたここを思ふのである。此の點、芭蕉こ共に日本の文學者中の双璧である。

以上わたくしは宗祇の晩年を叙してその全貌を描くべく筆路甚だ錯雜したるを耻ぢる。しかし、本稿は、これを以てわたくしの一つの覺書たらしめるこ共に、先輩識者に廣く敎へを乞ひたいこいふ微意から出てゐる。これを機緣こして更に新しい資料こ知識こを與へられるならばわたくしの本懷である。

なほ終りを急いだため明應以後の宗祇を叙する頗る簡に過ぎた憾みを有つてゐる。新つくば撰集時代の宗祇こ宗祇の句風こに就いては、他日くはしく述べたいこ思つてゐる。また本稿の資料蒐集には文學士笹淵友一君の助力を得てゐる。同君の勞を謝したい。